

2019.10.8.

NO

1

DATE

やまと あとがき うへ
倭の青垣 東の山の上

① 古事記のオホウニヌシ神話によれば、『少名毘古那神が
とこよのくに のち
常世国に瘦った後、大國主神が「これから自分一人で一体
どうやって国作りを進めてゆけば良いのか？」と悩んでいた
ところ、^つ海を^よ光^くして依り来る神」が協力を申し出て、
『^{あれ}吾^{やまと}さ^{あとがき}は^へ倭^{いづ}の^{まつ}青垣^{まつ}の^{まつ}東^{まつ}の^{まつ}山^{まつ}の^{まつ}上^{まつ}に^{まつ}拜^{まつ}き^{まつ}奉^{まつ}れ』と述べた』
とのことである。

同じく古事記の崇神天皇の章では、この神は「御諸山の^{みもろ}
^{おほみわ}意富美和の神」と表現されている。

また、日本書紀の神代篇第八段、^{あるふみ}一書^{あるふみ}の第六では、全く
同様の神話が語られており、ここでは「大^{おほみわ}三輪^{おほみわ}の神」が
^{おほなむす}大乙貴神^{おほなむす}（大國主神）に対して、明^{われ}瞭^{これ}に「吾^{われ}は^{これ}是^{いまし}、汝^{いまし}が
^{さきみたま}幸魂^{さきみたま}奇魂^{くしみたま}なり」と述べている。

即ち、「サキミタマ・クシミタマという存在は、本来、倭の青垣の
東の山の上」に祭るべき存在だ」と言っているのである。

② では、それは具体的には ^{どこ} どのような場所なのか？

まず、普通に ^{あそかき} 古語辞典を引いてみると、「青垣」とは、
「垣のように、まわりを青々とした山が取り囲んでいること。

また、その山。」を指す用語である。

なるほど、狭義の ヤマト地方 は盆地であり、草木のよく
茂った山々によって周囲をぐるりと囲まれている。

（これは、「中心」と「外郭」の象徴でもあるだろう。）

現実世界における ^{みちのやま} 御諸山 ^{おほみわ} や大神神社は、当時のヤマト地方
の東側というよりは、むしろ南東に位置しているのだが、
もちろん、神話で言う「東の山の上」はあくまでも象徴であり、
これを矛盾と考える必要は全く無い。

「東の山の上」は、夜明けに際して最初に ^ひ 日の光を
浴びる ^{どこ} 場所であり、その意味では、「太陽に一番近い
場所」である、と言っても良いだろう。

③ さて、ここで太陽を「中心」の象徴と見做すならば、

そして、倭の青垣やまと あとがきを引き続き「外郭」の象徴と見做すならば、

その「東の山の上」は、当然に「外郭の中では、最も中心に近い部分」を象徴する用語となる。

人間身で言えば、直日ナホヒ(中心)に最も近いのは奇身魂ウシミタマと幸身魂サキミタマであり、神話においても「倭の青垣 東の山の上」に

祭られる神は、オホウニヌシのサキミタマ・ウシミタマ である。

以上の事柄から考えて、この神話は人間に対して、

『人の身も、大國主神に神習かむならい、自身の幸身魂サキミタマ・奇身魂ウシミタマを

言わば「擬似中心」として仰あおぎ、それに相応ふさわしい形式かたちで

それを齋いき祭まつるべきなのだ』ということをお教えているのである。

(具体的な形式に関しては、神葬祭などの作法を参照のこと。)

(以上、おわり)

各国各地の古典に通じて認めらるるところである。

宇宙万有産出の祖神は對待を絶して居ること固よりであるから時間に拘はらず空間に限られざる唯一超絶の神にたましますのである。それで古事記は「隱身」とか「独神」とか「別天神」とか記し、極大で極小で極で無極で「零」であることを明にしてある。零とは大平等であるが人は其の中に自己なる一点を認めて其処に「カミ」を拝む。故に此の神は既に零ではない。隱身でも独神でも別天神でもない。相對の妙用妙象を現はされたのである。ではを御声として拝めば「カムロギ・カムロミ」であり御象として仰げば「伊邪那岐・伊邪那美」であり数として算めば「〇十」で $\oplus$ で十字架で十である。

此の「カミ」とは一であると共に二でまた三で五で十で百千万無量である。一としては天之御中主神で二としては高御産巢日神神産巢日神で三としては天之御中主神高御産巢日神神産巢日神で五としては天之御中主神高御産日神神産巢日神宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神で十としては宇比地邇神須比智邇神角杵神活杵神意富斗能地神大斗乃弁神淤母陀琉神阿夜訶志古泥神伊邪那岐神伊邪那美神で百千万無量としては百八百万天津神国津神と称へまつることを古事記は伝へてある。なほ日本書紀旧事本紀祝詞式等と対読すれば一層明瞭になるし他国他民族の伝へた古典をも併せて見るならば更に良いのであるが今は成るべく煩を避けて古事記だけに止めたい。

さてこの大宇宙たる高天原は超絶零界であるがその御活用を仰ぎまつれば神漏岐・神漏美として万有を発現するので之を皇親と讃へまつる。その皇親とは「スメモツ」であり「スメラガムツ」であり「スメラガムツミマスナル」であり「スメモヤ」である。「スメモヤ」としては皇祖である。けれども皇祖とは等しくして僅に異なる。「祖」とは「ミオヤ」であるが「親」は更にその御活用を示して相和ぎ相親しみ相睦み相誘ひ相合ひ相交はるの義

であるから「カムロギ」であり「カムロミ」であり「カムルミカムルギ」である。駢言でもあり活用語でもあり其の時と其の人と其の処と其の祭典の目的とに相応して変化するのである。

天之御中主神と称へまつるのみでは一切を包括し給ふ御名であるが其の御活用を仰げば高御産巢日神神産巢日神にてましますからそれを祖神としては神漏岐神漏美とも伊邪那岐伊邪那美とも称へて皇祖で皇親で「皇親大倭須米良岐美」で「吾大伎美」で「伎美」にてましますのである。之を支那人は陰陽と呼びまた乾坤とも称へ近く身に取りては男女と云つて居る。日本人は敬虔の念から「加微」と称へ支那人は不可測だからとて「神」と呼び陰陽だと云つたまでの異別なので共に「祖」で「親」で「ミオヤ」で「オヤ」である。

その「ミオヤ」の「ミイノチ」の変幻出没が人であり物であるからとて「天命」とか「命」とか書き天神の詔命なればとて「ミコト」と称へ「ミコトノリ」と仰ぎ「オホセ」なりと畏みまつるのである。

此の御声として拝む神漏岐神漏美の妙用を高天原にては「男建」と呼び「雄詔」とも称へて大宇大宙の勅命則

別天神の命で古事記に所云の「天神諸命」である。そこで神漏岐神漏美として男建び雄詔ぶ大宇宙の神勅のままに皇親の神には百八百万と在る限りの神を神ながらにお集め遊ばされてその神道を神の遍爾遍爾神顯し各自各自の神性を發揮させようとて神ながらにお譲り遊ばされお諭し遊ばされお教へ遊ばされお導き遊ばされた。その結末として八百万神は皆悉宇宙の事理を明にしたのである。之を人間的に観て現今の詞で言ふならば「正しき与論」を作られたので茲に其の真理のままなる国を建てさせ給ふとて先其の中心の超絶性をお示し遊ばされたのである。則国家機構の中心は唯一超絶神にてましますし日本民族は之を皇御孫之命と讃へまつり仰ぎまつるのである。

大宇大宙の大中心

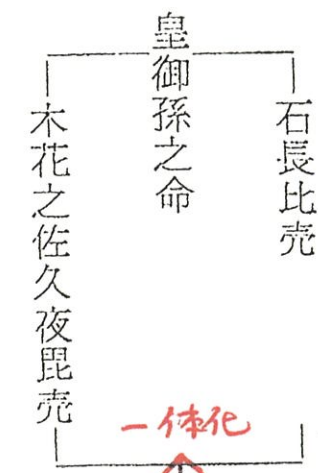
宇宙(時空)全体の中心

人類世界(地球)の中心

はてしと神の零

はてしと神の魂

はてしと神の身



へまつるが如く経に次序を逐ふて其の御名を異にされるが与に一貫したる「カミ」にてまします。更に人類世界の神としては

葦原醜男

大國主の別名

↑
意富耶馬台須米良岐美
↑
と称へまつるのである。

理想上の天皇

人間身(皇太子)

大國主の息子

天皇自身は人間身ではあるが、皇御孫之命の諸力を正しく継承し「人類世界の中心」として機能することによって、オホヤマトスメラギミと称えられるべき存在となり、アシハラシコラとヤヘコトシロヌシの諸力をも行使できるようになるのである。

ところがその国は本来神魔包括の○の神であるから時あつては神とも成り魔とも変るので人間の波瀾が其処に起る。皇御孫之命は天降りまして人間世界を統治統率し給ふ為に人間身として君臨せさせ給ふので人は茲に五宮的に拝みまつることの出来る「神」即「中心」を仰ぎ得たのである。アシハラシコラは生大刀・生弓矢で八十神を

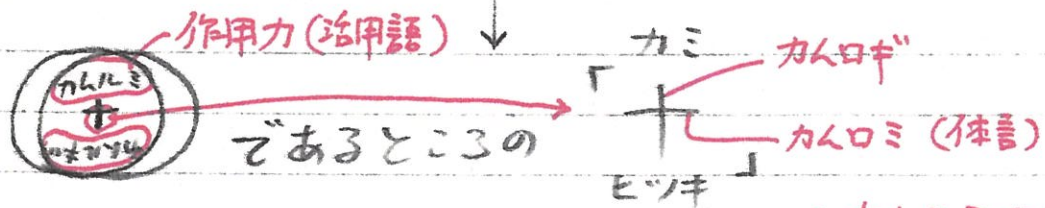
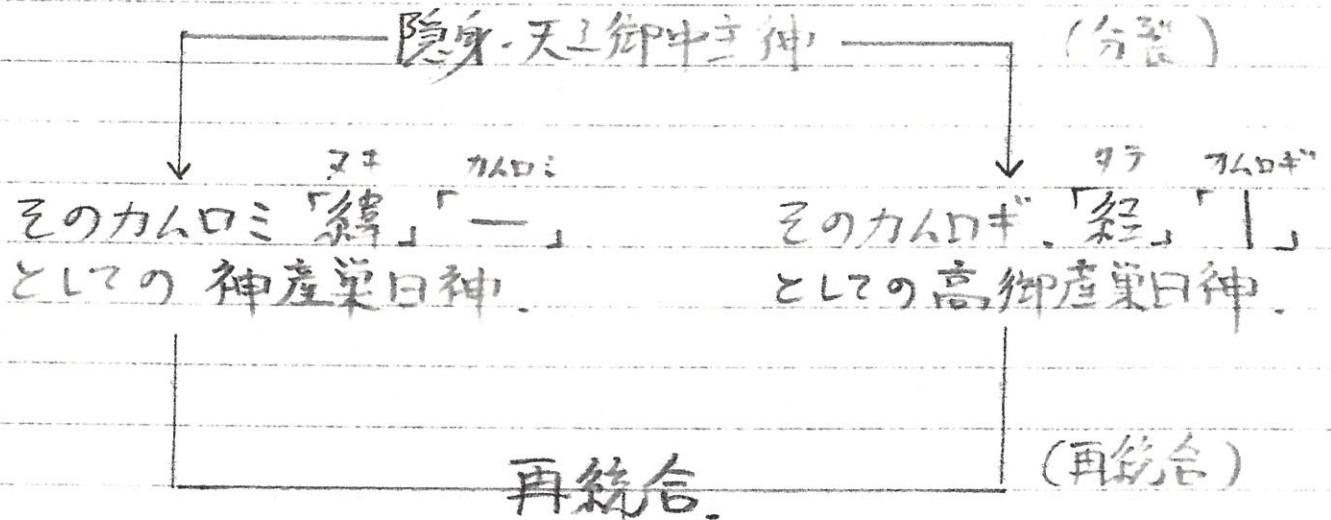
阿那畏。

日本語にては此の「神」を「オホヤマトスメラギミ」と称へまつりて「葦原醜男」「八重事代主」の妙用を御現はしますことと拝承します。

人間世界の波瀾曲折は隱身天之御中主神が神魔の軀にてまします為の活用変化なのである。之を数として見れ

未来250頁の図「ヒノカミとしては」の説明

未来230. 『その「^{カミ}十」と結び結ぶ（元としての）^{ヒノカミ}隠身』



即ち、「ミオヤ」と称ふる「加徴」^{カミ}であるところの^{かんルミかんルギの作用力によって、かんロギとかんロミは正しく結合している。}

⇒天祖^{アノミオヤ}や日神^{ヒノカミ}を意味する。

典型的には（ヒノカミとしての）天照大御神

→ 基本的には『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

ば零の内容が二であり三であり四五六七八九であり然うして一であり十であるが為に其の一二三四五六七八九の加減乗除が美とも醜とも善惡とも正邪曲直とも変化し治乱興廢ともなるのである。之を換言すれば善惡も美醜も正邪曲直等も「我」の外なるものではないのである。此の「我」を古聖は「如来」と呼ばれた。そこで

「如此依志奉志国中爾荒振神等乎婆神問志問志賜神掃掃賜比語問志磐根樹立草之垣葉乎毛語止比天磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別比天降依志奉伎。」

と、高天原なる皇親の命には人の国を神の国と築き成されて建国の天道をお示し遊ばされたのである。此処で注意すべきことは「天磐座・天降」の文である。「天磐座」は○界であるから説明語の用ゐやうが無い。けれども此処に用ゐた文字に従つて堅固の意とするならば堅固になること此の上も無い。が此の「磐」は「イハサカ」の「イハ」と等しく正しく発き升る義を表したのである。それ故に人間から仰げば「天降る」であらうが「高御座」たる「天磐座」の御光は十方に等しく発くので「正しく升る」ので方位に拘はるのではない。十表に雄走る稜カミノミツ威である。神代に於ては之を「稜威雄走神」と称へまつる。その雄走が発き発くのであるから茲に「天磐座放」とある「放」は「従」の誤りである。若しも「放」とするならば下降転落で不祥の語となる。天之磐座を放れずして天降りましますが故に神位なのである。此の神位を高御座として国土を経綸し給ふが故に重重無尽の円光として万世一系にましますのである。

既に述べたる如く中心は唯一超絶の零神ヒノカミでそれが高天原にては皇親神漏岐神漏美命と仰ぎまつられ神国淨地を築きては皇御孫之命と讃へまつらるのである。然うして皇親の神には建国の大本をお示し遊ばさるると与に悪神邪鬼をば教へ諭して其禍マガを掃ひ清め草木の一葉までも乱れ擾ぐこと勿らしめてさて高天原なる神座より神代の

ままに神ながら神の国を築き成すべくその神を人間世界にお降り遊ばされたのである。皇御孫之命にはその皇親の勅命のままに猛然踊躍してお降り遊ばされたのである。

往くか返るか来るか去るか。窮め来れば唯は一点である。之を古老は「高天原」だと教へさせられた。斯くして此処に此のまま高天原は成り成る。

「如此久依^{左志}奉^志四方之国中斗大倭日高見之国平安国止定奉^下津磐根^爾宮柱太敷立高天原^爾千木高知^氏皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉^氏天之御蔭日之御蔭止隱坐^氏安国止平氣久所知食^武。」

之を第三段とする。第一段では中心としての皇御孫之命とその外廓たる八百万神との關係を教へて先其の中心の確立と外廓の統一とを命ぜられ第二段では外廓の分裂と統一と其の結果とを明にせられ「天之磐座」のそのまななる神国淨地を人間世界に築き成したる暁を第三段に詳述せられたのである。

その神国淨地は「大倭日高見之国」と呼ばれるので「四方之国」を外廓として緯^{ヌキ}の在るかぎりと「下津磐根」「高天原」と下の下までも上の上までも経^{タテ}としての在るかぎりとを「美頭乃御舍」即「天之御蔭日之御蔭」としてその中心に隱り^{コモ}「隱身天之御中主神」^{カクリミ}のそのままに上天下地四維八隅一切合切を安らけく平けく統治統率せさせ給ふ。

それは人間身として拝しまつることを得る御玉躰が高天原にての皇親神漏岐神漏美命にたましまし隱身の神としての天之御中主神にたまいますが故に近く図解を借りて説明すれば○なる球躰で⊕である。之を古聖は十字架と教へられた。「十字架上一点之火」は時空を超えて時空を現はしつつ過去も如是将来も如是現在も如是経に緯

に際涯無き日なる光である。之を「日神」^{ヒノカミ}とも「⊕」^{ヒノカミ}とも「●」^{ヒノカミ}とも称へて来たのは人間身の機能相応に判り易かりめた神の御魂である。

くにみづ

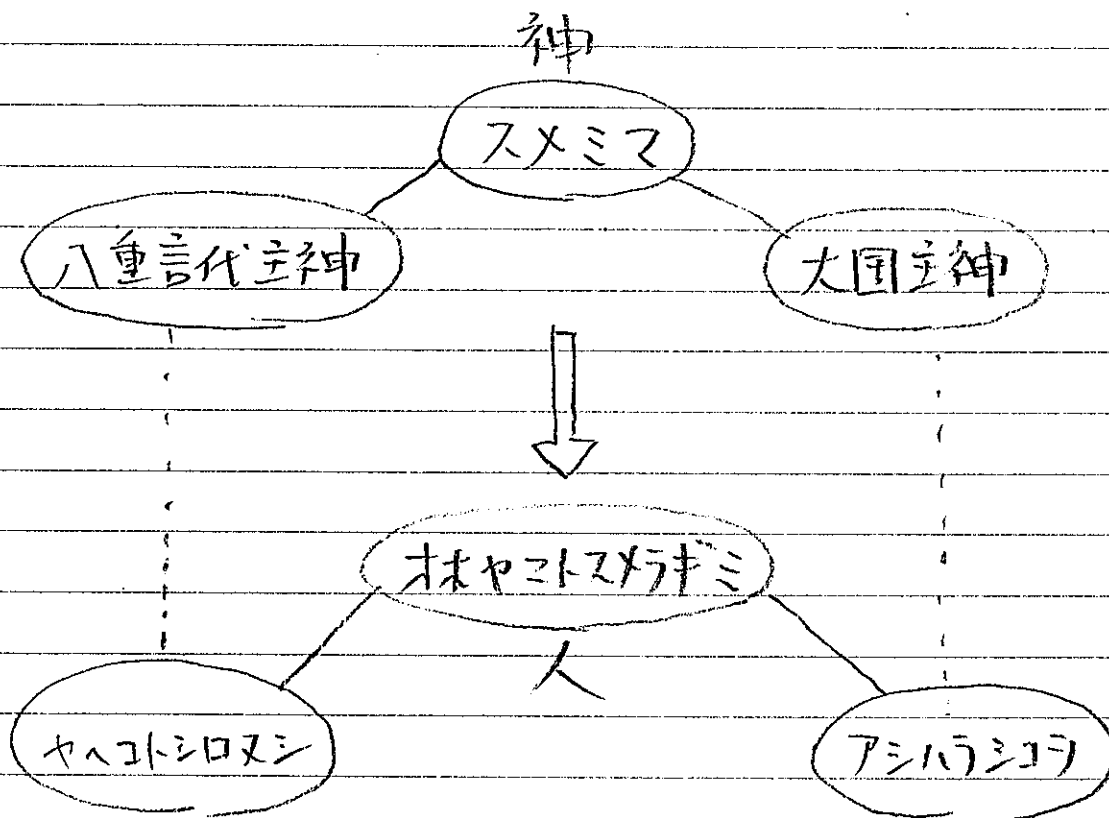
天孫降臨の神話で、実際に国譲りをした「主体」は、

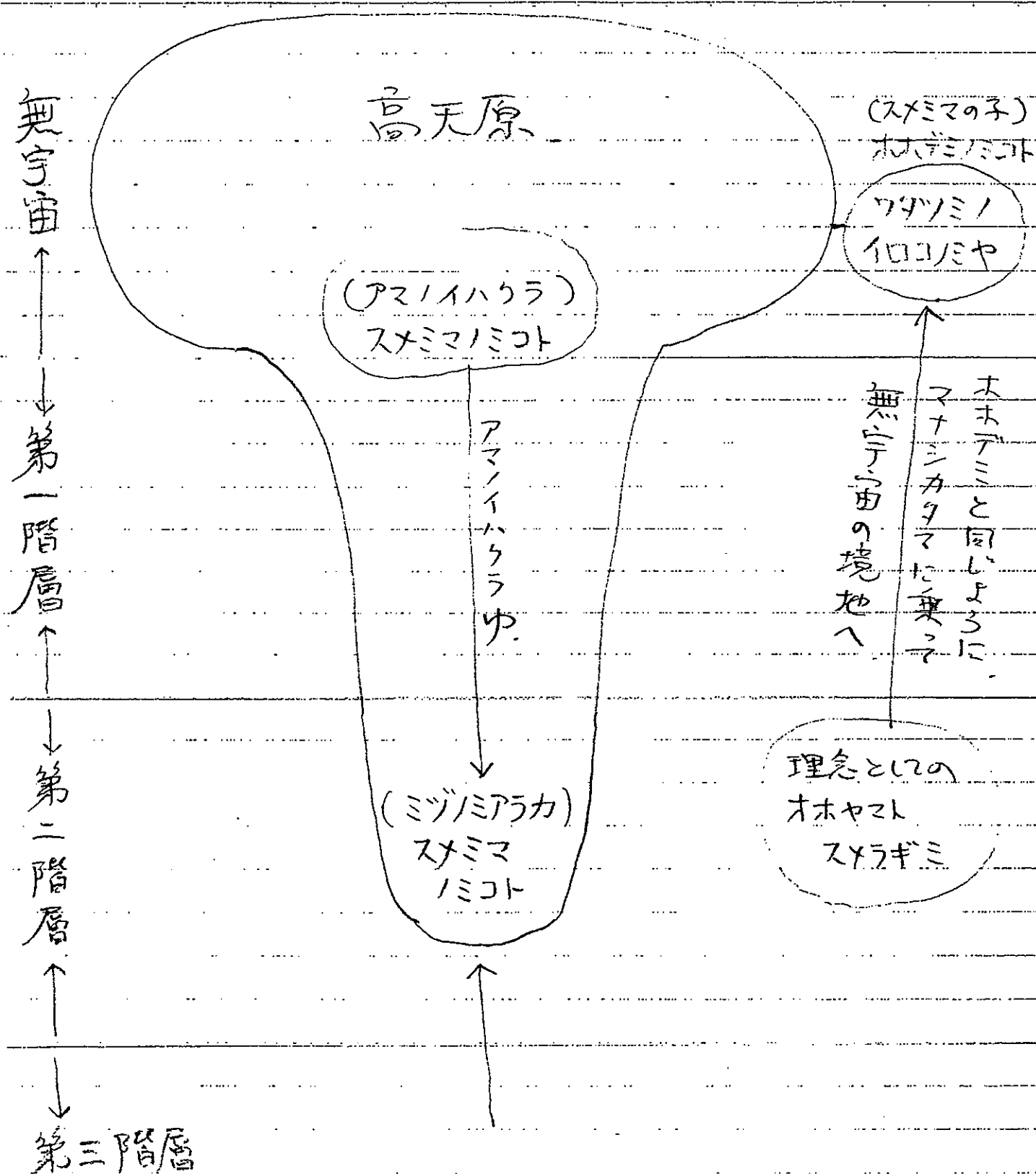
大國主神（葦原醜男神）とその御子、八重言代主神である。

これに神習って、オホヤマトスミラギミ（即位儀礼によって、

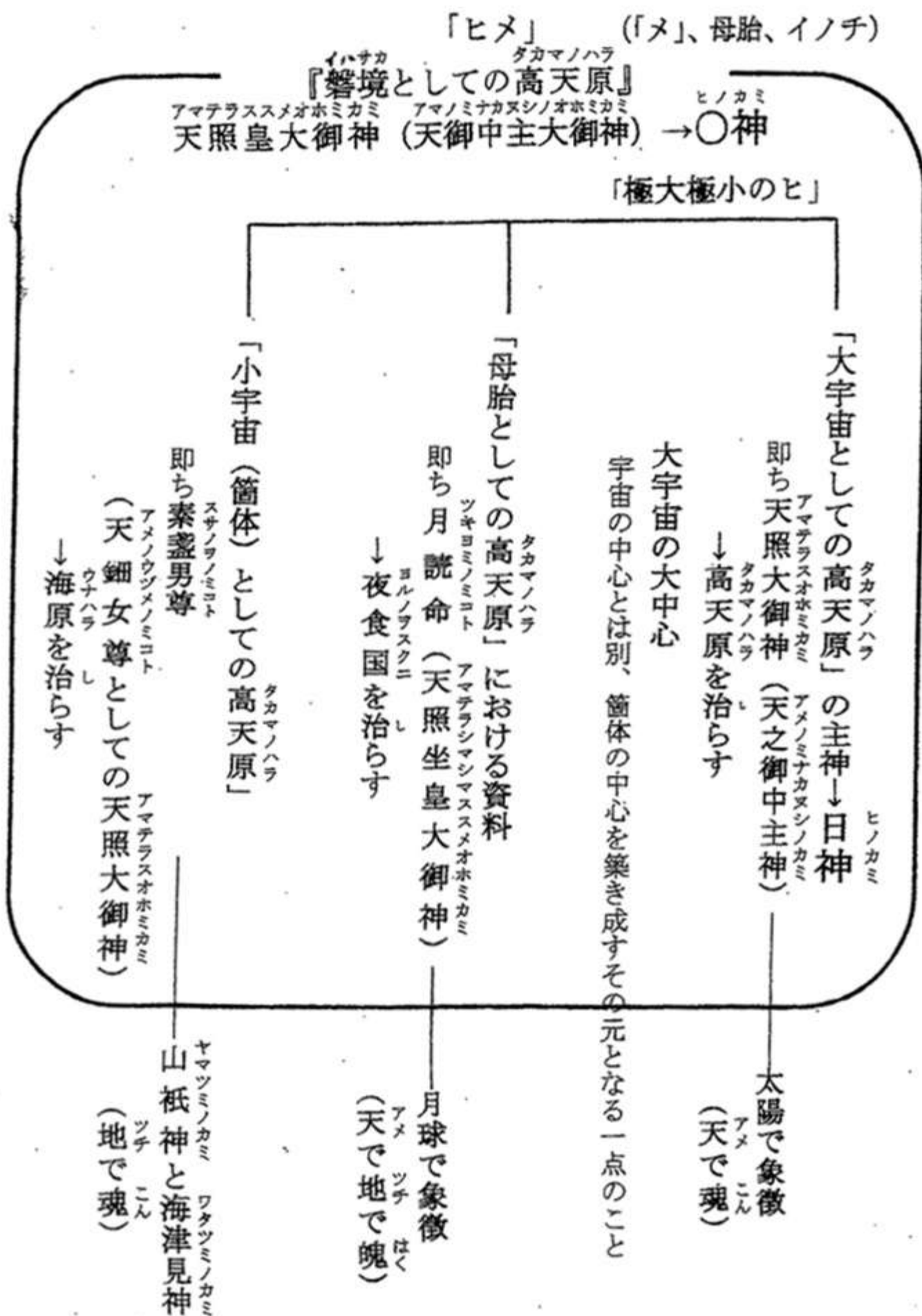
スミマノミコトと一体化したところの天皇）は、

アシハラシコヲとヤヘコトシロメシの作用力を司るのである。





高天原と零神と「ヒメの秘事」



右の件くだりの八島や士奴美神じぬみ以下、遠津山岬帶神とまつやまききたらしの以前よりさきを、十七世の神とをまりななよと稱なをす。

7 少名毘古那神と国作り

故かれ、大國主神おほくにぬし、出雲いづみの御大みほの御前みさきに坐ます時、波なみの穂ほより天あめの羅摩船わかみぶねに乘りて、鵝五の皮かわを内剝うちはぎに剝はぎて衣服きものにして、歸きり來くる神ありき。ここにその名を問はせども答へず、また所從みともの諸神かみたちに問はせども、皆「知らず。」と白まをしき。ここに谷蟬たにくまを白まをしつらく、「こは崩彦くえびこぞ必ず知りつらむ。」とまをしつれば、すなはち崩彦を召して問はす時に、「こは神產巢日神かみむすひのの御子みこ、少名毘古那神すくなびこなぞ。」と答へ白しき。故かれここに神產巢日かみむすひの御祖命みおやのに白し上げたまへば、答へ告りたまひしく、「こは實まことに我が子ぞ。子の中に、我が手たなまた俣またより漏くきし子ぞ。故かれ、汝葦原色許男命あにをとと兄弟あにをととなりて、その國を作り堅かためよ。」とのりたまひき。故かれ、それより、大穴牟遲おほあなむぢと少名毘古那と、二柱の神相並ならばして、この國を作り堅めたまひき。然さて後は、その少名毘古那神すくなびこなは、常世國とこよのに度わたりましき。故かれ、その少名毘古那神すくなびこなを顯あらはし

一 実数は十五世。

二 鳥根県八束郡美保の岬。
三 白く高く立つ波頭。
四 ガガイモ。その実を割ると小舟の形に似ている。
五 鵝では大き過ぎ、皮というのにも当たらない。記伝には蛾の誤りとしてヒムシと訓んでいる。
六 丸剥ぎにして。
七 ひきがえる。
八 かかし(案山子)。
九 小人の意か。名義未詳。

一〇 海のあなた極遠の地にあるとこしえの齡の國。書紀の一書には、熊野の御崎から常世郷へ行ったとも、淡島から粟莖にはじかれて常世郷に行ったとも伝えてある。

白せし謂はゆる崩彦は、今者に山田のそほどといふぞ。この神は、足は行かねども、盡に天の下の事を知れる神なり。

ここに大國主神、愁ひて告りたまひしく、「吾獨して何にかよくこの國を得作らむ。孰れの神と吾と、能くこの國を相作らむや。」とのりたまひき。この時に海を光して依り來る神ありき。その神の言りたまひしく、「よく我が前を治めば、吾能く共與に相作り成さむ。若し然らずは國成り難けむ。」とのりたまひき。ここに大國主神曰ししく、「然らば治め奉る狀は奈何にぞ。」とまをしたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に拜き奉れ。」と答へ言りたまひき。こは御諸山の上に坐す神なり。

8 大年神の神裔

故、その大年神、神活須毘神の女、伊努比賣を娶して生める子は、大國御魂神。次に韓神。次に曾富理神。次に白日神。次に聖神。また、香用比賣を娶して生める子は、大香山戸臣神。次に御年神。二また、天知迦流美豆比賣を娶して生める子は、奥津日子神。次に奥津比賣命、亦の

一 山田の「そぼづ」と同じで、かかしのことと言われている。
二 かかしに対する古代農民の信仰をあらわしている。

三 わたしを祭ったなら。

四 大和の国の周囲を青垣のようにめぐっている山の東の山上に祭れ。
五 奈良県磯城郡三輪山の大神（オオミワ）神社の祭神。

六 この国の神霊の意。
七 文字通り韓（朝鮮）の神の意か。
八 日知りの神、即ち暦日を掌る神の意か。
九 前の大年神、後の若年神と同じく、年穀を掌る神。
祈年祭の祭神の一。

謂りて曰はく、「吾等が所造る国、豈善く成せりと謂はむや」とのたまふ。少彦名
命対へて曰はく、「或は成せる所も有り。或は成らざるところも有り」とのたまふ。
是の談、蓋し幽深き致有らし。其の後に、少彦名命、行きて熊野の御碕に至りて、
遂に常世郷に適しぬ。亦曰はく、淡嶋に至りて、粟莖に縁りしかば、弾かれ渡りま
して常世郷に至りましきといふ。自後、国の中に未だ成らざる所をば、大己貴神、
独能く巡り造る。遂に出雲国に到りて、乃ち興言して曰はく、「夫れ葦原中国は、
本より荒茫びたり。磐石草木に至及るまでに、威に能く強暴る。然れども吾已に摧
き伏せて、和順はずといふこと莫し」とのたまふ。遂に因りて言はく、「今此の国を
理むるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下を理むべき者、蓋し有りや」と
のたまふ。

時に、神しき光海に照して、忽然に浮び来る者有り。曰はく、「如し吾在らずは、汝
何ぞ能く此の国を平けましや。吾が在るに由りての故に、汝其の大きに造る績を建
つこと得たり」といふ。是の時に、大己貴神問ひて曰はく、「然らば汝は是誰ぞ」と

のたまふ。対^{こた}へて曰^いはく、「吾^{われ}は是^{これ}汝^{いまし}が幸魂奇魂^{さきまたましくしみたま}なり」といふ。大己貴神^{おほあなむちのかみ}の曰^{のたま}はく、
 「唯^し然^かなり。廼^{すなは}ち知^しりぬ、汝^{いまし}は是^{これ}吾^{われ}が幸魂奇魂^{さきまたましくしみたま}なり。今何^{いづこ}処^こにか住^すまむと欲^{おも}ふ」との
 たまふ。対^{こた}へて曰^いはく、「吾^{われ}は日本^{やまと}の三^{さん}諸^{しよ}山^{のやま}に住^すまむと欲^{おも}ふ」といふ。故^{かれ}、即^{すなは}ち宮^{みや}
 を彼^{かしこ}処^こに営^{つく}りて、就^ゆきて居^ましまさしむ。此^{これ}、大^{おほ}三^{さん}輪^{りん}の神^{かみ}なり。此^この神^{かみ}の子^{みこ}は、即^{すなは}ち甘^か
 茂^{もの}君^{きみ}等^{たち}・大^{おほ}三^{さん}輪^{りん}君^{きみ}等^{たち}、又^{また}姫^{ひめ}踏^ふ躰^{たう}五十鈴^{いすず}姫^{ひめ}命^{こと}なり。又^{また}曰^いはく、事^{こと}代^{しろ}主^{ぬし}神^{のかみ}、八^や尋^{ひろ}熊^{くま}鰐^{わに}
 に化^な為^なりて、三^{さん}嶋^{しま}の溝^{みぞ}織^お姫^{ひめ}、或^{ある}は云^いはく、玉^{たま}櫛^{くし}姫^{ひめ}といふに通^{かよ}ひたまふ。而^{しかう}して児^{みこ}姫^{ひめ}踏^ふ
 躰^{たう}五十鈴^{いすず}姫^{ひめ}命^{こと}を生^うみたまふ。是^{これ}を神^{かみ}日本^{やまと}磐^{いわ}余^{あま}彦^{ひこ}火^ひ出^で見^み天^{あま}皇^{みかど}の后^{きさき}とす。
 初^{はじ}め大^{おほ}己^こ貴^き神^{かみ}の、国^{くに}平^{ひら}けしと^{とき}に、出^{いづ}雲^{ものく}国^{くに}の五十^い狭^さ狭^さの小^こ汀^{づつ}に行^ゆ到^きして、飲^み食^をせむと
 す。是^この時^{とき}に、海^{わた}上^{つみのうへ}に忽^{たちまち}に人^{ひと}の声^{こゑ}有^あり。乃^{すなは}ち驚^{おどろ}きて求^{もと}むるに、都^{ふつ}に見^みゆる所^{ところ}無^なし。
 頃^{しほらく}時^{とき}ありて、一^{ひと}箇^をの小^こ男^{なを}有^ありて、白^か藪^{がみ}の皮^{かは}を以^もて舟^{ふね}に為^{つく}り、鷗^{ささぎ}鷗^{ささぎ}の羽^はを以^もて衣^{ころも}にして、
 潮^{しほ}水^{まにま}の随^うに浮^{いた}き到^{いた}る。大^{おほ}己^こ貴^き神^{かみ}、即^{すなは}ち取^とりて掌^{たなうら}中^{ちゆう}に置^おきて、翫^{もてあそ}びたまひしかば、跳^{をど}
 て其^{その}の頰^{つら}を嚙^くふ。乃^{すなは}ち其^{その}の物^{もの}色^{いろ}を怪^{あやし}びて、使^{つかひ}を遣^{まだ}して天^{あま}神^{つかみ}に白^{まう}す。時^{とき}に、高^{たか}皇^み産^{むす}霊^{ひの}
 尊^{みこと}、聞^{きこ}しめして曰^{のたま}はく、「吾^{われ}が産^うみし児^こ、凡^{すべ}て一^{いち}千^{せん}五^ご百^{ひゃく}座^ざ有^あり。其^{その}の中^{ちゆう}に一^{ひと}の児^こ最^{いと}

第七節

御祖神の神挂りと白しますのは、倭の青垣東の山の上の祕事で、天香具山眞賢木比咩の御教で、即、天宇受賣の神挂りなので、「我と我が身を齋りて、此の身此のまゝ神の身たる大御寶と成らねばならぬ神儀行事である」と、宗教的には白しますが、政治としてならば、萬邦一圓の樂土と成すことで、學問としてならば、その科學たると文學たると哲學たるとを問はず、すべてが神界を發き得べき方圖を明にすることで、藝術としてならば、そこにそのまま、神國樂園を現し得たので、軍務も農産も商工業の如きも、萬般の事業は皆悉く其のまゝに、神の日を拜し、神の國に入り、神と共に住み、神と共に思ひ、神と共に語り、神と共に行ひつつ、やがては、太極の位に於て、一圓光明の零と成るので、それを、誤解することの無きやうにとて、此の零を得るのだと重ねて白すのであります。

自分自身に自分自身を齋祭ると云ふことは、先に擧げた古事記の本文だけでは、或ははつきりとせぬかも知れず、日本紀や常陸風土記などを對讀しても、なほ或はどうかと思はれますが、その身の困つて居る時には、天を呼び、神を求めて止まぬ爲に、おのづから大道を踏みはずすやうなことも無く、事業も正しく進行する。ところが、その順調に進んで居る時に、兎もすれば、心の緩みが出來、身にも隙が出來て、細徑にさ迷ふやうなことが起りがちである。さうなれば、自分自身に、自分自身の主を失ふ。國としてならば、その國の中心を忘れる。つまり、少名彥名命は隠れ去つて、大穴牟遲は、「獨能く巡りて、その國を造り、出雲國に到り、葦原の中つ國は、

もともと荒れに荒れて、磐石草木までも皆ことごとく強暴であつた。けれども、自分は今已にそれを摧き伏せて、すっかり和順させた。此の國を理むるは唯吾獨のみである」と云ふやうになつて、先に擧げた大國主神とは全く別な傳を日本紀の一書に遺されたのである。すると、その時「神光アヤシキヒカリが海を照らし、忽然と浮び來れる者が有つて、汝の其の大造の績を建て得たのは、吾在るが爲である。吾在るにあらざれば、汝のみが何うして此の國を平げ得ようぞ」と云はれた。斯く云ふものは、大穴牟遲の幸魂奇魂で、大三輪の神と稱へ、倭の青垣東の山の上に坐しますのである。之をまた、三諸山の神と白しまつるのは、日の神の肉體身と云ふことで、その肉體身在るので、人は自分自身を知り、宇宙萬有をも知り、日神を拜みまつることが出来るのである。ですから、此の肉體身は、大三輪であり、また三諸山であり、日神の三田の賜物であつて、知知とも波波とも呼ぶところの御祖神である。

なアんだ、そんなことかと氷解するか何うかは知れませんが、

みもろは、かみのもるみや。みもろとは、かみのしらして、いつのよに、たれかまなびて。ひふみよと、かたりきにけむ。いつむゆな。やよここのへの、きみが身ぞ、はじめをはりも、はてもかぎりも、あらぬひつきと、人の仰げば。かくしこそ。ことの、かたりごとの。ひふみよい。むゆなやことと、うけふみけりな。かみのうけひて。かみのうけびて。かみのをしへて。かみかかります。

と、教へられています。

「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」
ハラヘコトバ

マキリツドヘルヒトビト クニツチヤマカハ 草木。空行雲毛。地潜虫毛。天地乃在乃尽。今日乃祓乃御祭爾。各自各自我。
アヤマテオカシケム クサグサノトガトイフトガ ツミトイフツミノ アカトケガレトヲ ハラヘヤラヘキヨメタマフ カミノカミワザ カミコトタマヲ ツツシミカシコミヲロガミマセ
過犯計牟。 雑雑乃尤云尤。 罪云罪乃。 垢斗穢斗乎。 祓却閑清給布。 神乃御惠。 神言靈乎。 敬美畏美拜美坐勢
斗マラス。 白須。

伊宇袁衣耶。
表

宇斗乃宮。 宮斯呂築成住我乎。 神乃我叙斗。
神知須邇邇。 神乃神輪叙晃耀赫灼矣。
テルニ テリタル

阿知米。

阿知米。

阿宇袁衣耶。 宇。 宇。 宇。 宇斗。 宇斗。 宇。

カク ウシナヒテバ アメツチノアリノコトゴト ケフヨリハジメテ ツミトイフ ツミハアラジト ハラヘヤラヘタマフコトノタフトサヲ カシコミカシコミテ ヲロガ
如此久失底婆。 人天万類尽天尽地。 今日以降。 罪止云布罪波不在止。 祓却給事乃尊乎。 恐美惶美且。 奉
ミマツリ キヤマヒマツリ マツリマツルトマヲシマツル アマテラスオホミカミ カムロギノミコト カムロミノミコト タケハヤスサノジノミコト ト オホミナハ タタヘマツリテ アメノ
拜。 奉感謝。 奉 祭止奉白留。 天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命止。 大御名波奉称且。 天

祖天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊。 畏。」
ミオヤアメノヅルヒノアマノサギリクニヅルヒノクニノサギリノミコト カシコシ

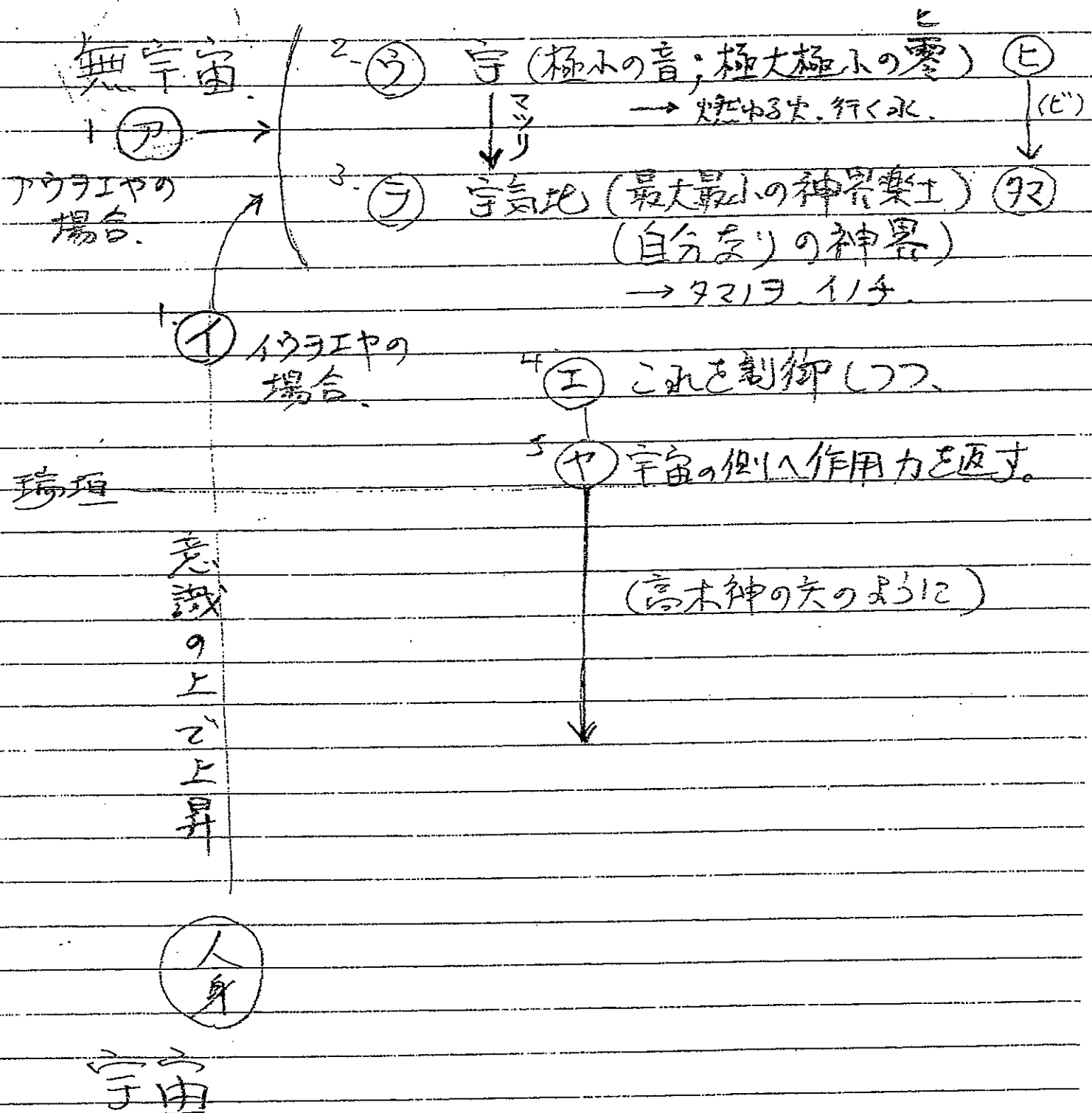
③

②

220 ?

①

イウヲエヤ と アウヲエヤ の区別



「極大極小」

⑤の段階

人間の身では理解できない。

⑥の段階

アマノイハヤト

(人間の認識能力の限界)

「最大最小」

⑦の段階

人間の身でもかろじて理解できる。

直日

最大最小の神界楽土

歪められることなく

きれいに直結できた時

無宇宙の實在が持つ諸力が

そのまま人間世界に実現する。

人の身ながら
神となる。

この上このまま
高天原

やくさかみかみこそかかれか
みのことかみのまにかみし
らすまに。

生死は「月」の教ふところ
なりとて日本書紀と舊事紀に於
ける「月夜見・月弓・月讀命」
の傳と「月讀命と保食神」との
神話を生じたるなり。
然り。

神話と稱するものは各國にて
神傳を小説化したるものにして
其の神傳の心を正しく傳へたる
ものと然らざるものとの混淆し
て流布せられつつあるなり。
之れを思ふ。

東天西地南池北溟の理。

所謂良心無きものを北溟の幽
鬼と名づけて□□□□の如き
ものなり。

彼が如きを蛆と呼ぶ。

蛆を教ふるには水を以てす。

水を用ゐて後に火をを以てす。

水火相和して湯をなすを青垣

東山と稱へて降三世明王と真言
宗の教へたるところなり。

あちめおおお。

之れをアチメと稱し、アチメ
オオオともオオオとも稱するな
り。

而して其の水知合する前の、ハ、ハ、ハ、火とは八種雷に

して妖魔幽鬼の群団なり。

「蛆タカレトロロギ」と古事
記に記したる黄泉津醜女なり。

フルベユラユラトフルベ。

ヌナトモモユラ。

閉戸籠居三年有半。

柳暗花明徒匆忙。

飛燕三五西又東。

細雨濛濛堤下村。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ

ヒメアアヒガテンジユウアイコ

ウ。

ウトノミヤシロ。

ウトノカミミヤ。

ウトノミヤ。

ウト。

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウト。ウ。

ヨシ。

ヒミリを成すこと自体を青垣東山と稱す。
それの出来上がった境地をアチメと稱する。

フルベユラ。以下の文は、「蛆タカレトロロギ」たる妖魔幽鬼の
群団を調伏・救出するためのコトナマ。

祭祀答問録(三)

多田雄三

④ ミソギが活物であれば祭祀も活物でありませう。若し然なりとすれば、活物なる所以、及、活動の状態。

⑤ 此の「マ」と彼の「マ」とが抱合合体して新しき箇体を築く。それだから、祓禊と呼ぶも、祭祀と名づくるも共に等しく活物であり、それが直に活動の状態で、破壊しては建設し、建設しては破壊する。生まれては死に、死にてはまた生まれる。則、徹頭徹尾活動で、分秒の間と雖も止むことは無い。此の活動は、生死を超越して無始無終に無際限に活潑潑地に生死流転を展開して居る。然して、その到り着いたところは、大平等海なる「タカマノハラ」である。

問

祭祀の教は単なる倫理や道德ではないと思はれます。そこには救済があり、久遠の生命があるものと考へます。

答

人の道は斯くあるべしと標識を立てたのが倫理であり道德であるとすれば、それを超えて、つまり、時間と空間との限界を超越して、無始無終に無際限に流行流転する神律に随順して行はれるのが「マヅリ」である。故に、その行事は必や、久遠の生命に由るのであり、その結果は必や、彼岸に到達するのである。彼岸とは「タカマノハラ」で、それを圖に示せば○である。此の○は太平等海だから固より久遠である。生死を超えたる「イノチ」である。之レを「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称へまつる。

問

「原始反終」の語は祭祀を教へものでありませうか。

答

之れは易經の語。

始を原ね原ねて止まざれば、忽然として臍裡脚下に在り。出でては入り往きては返る。天津金木の太麻邇たる○象を悟證すべきである。經も無く緯も無く、始もなく終もなき妙境である。「アチメ」と呼び、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と称まつる。

フルコトフミフ
古事記日本書紀等に傳へたる此の神言と詩篇の言とを總合し翻譯すれば次の如くなるべし。

○ ヒノカミノカミワザナリナリテノゾミミタレバ 日神の神功成て眺望たれば。海も海にはあらず山とても山にてはなし。我れに仇するものは自斃れ。我れを虐げんと謀れるものは己が放てる矢にて胸をば射貫かれたり。見よ。ワギミの神 カミノカミワザ 事の何如に威烈しき オソロ かを。

語を換へて云へば。

○ トシテ 日月昭昭不_レ容_ニ邪曲_一。

○ トシテ 天地默默萬類蕃息_一。

月明なる夜ではあるが、北方の山のあたりを眺むれば、紺青の色濃き中に、燦燦と星は光つて居る。ところが、不思議。我が顯魂鎮まるまゝに、我が幸魂躍るがまゝに、我が奇魂雄走るまゝに、我が眞魂の締り締りて、我が和魂澄み清みたれば、星も無く、月も無く、山も、水も、將、大空さへも、唯一圓の光と化りて、それがそのまま、森森羅羅、萬象萬物、出入往返。八百萬神は、歡喜勇躍。過去も、將來も、現在も、上も、下も、四維八隅も、一切合切が、皆唯、一點より出で、一點に歸り、一點に繋がる。功罪賞罰、隠るるに處無く、遁るるに途無し。奇なる哉。妙なる哉。此是死_シ矣。又是矢_ヤ矣。

古老は、之を讚嘆して、「阿知米」と稱へたのである。

以上 第四章 終

昭和十九年四月十二日 東京都鷺宮祓禊所_{ミソギ}に在りて 多田雄三 山谷淨書

死生觀の解説は、之で盡きて居る。けれども、本文は、なほ三分の二も有る。今、それを、第五章として、此

歴史を讀むは郷土史を讀むよりも迂遠にして、外國歴史を讀むは更に更に迂遠なり。

然れども、世道人心を指導教済せんと欲せば、家庭史を讀ましめよ。郷土史を讀ましめよ。國民史を讀ましめよ。國土史を讀ましめよ。

人間歴史を讀めば人間行路は知らるるなり。

人間行路を知ることば、人間の目前と生活と生死とを知ることにして、過去を知りて、將來と現在を知ることなれば、人と

しての基準を知らるるなり。

人としての基準を知れば行止進退に迷ふこと無く、惑ふこと無く、一團昭昭として八面玲瓏として、水晶球裡に坐するが如くなり。

故に名づけて白玉なり、皇土と稱へまつれる天皇なり。
アテメオオオオとは稱するなり。

(ここに左の「之レ人間歴史ノ目次ナリ。」が入ります)以上。

古老今人を介同

水晶球にふて

家史
郷土史
國民史
天皇史
人類史
國體史
國際史
之レ人間歴史ノ目次

讀筆の先生三雄田多谷

萬葉集講註(四)

多田雄三

「カタマ」は璽である。カタマダマ

「籠」とあるのは、古事記まなしかたま

「間無堅間」と載せて、璽土しほつち

の神徳である。

主宰統一とか、統治引率とか、

結君臨とかの義で、結繩治國

「不空羅索觀世音菩薩」と佛

に傳ふるところで、「聖無動」

金剛繩で、「光ハ加美ナリひかり かみ

。」といへる光である。

伊勢大神宮をはじめとして、

本の神社に、水精球を神寶と

るのは、此の璽の意で、「マナ

カタマ」の「カミカカリ」で、

シホツチノオデ」の「スクナ

ニ」で、「アメノミオヤ」の「ウ

ニ」を知らしめたのである。

「フグシ」が劔である

「夫久志」とは、「金剛手」と

佛教に傳ふるところで、「文殊

師利」で、「金毛獅」で、「八葉

連座」で、「ニマイヌ」で國常立くにとこたち

の御食である。みけ

それは、「フグシ」が、神言璽

であつて、時間として經過する

義の「フ」と、奇怪異璽の極端

なる義の「グ」と、これを、主

宰統一して逸脱せぬ義の「シ」

との三音義合成の音義が、築城

建國、修理固成であるから、すりかためなすなる

物資を整理し統一して完全圓満

なる箇體を築き成すので、禍津

毘を調伏し済度し、救出する神

徳、すなはち、武徳である。

利劔である。

古事記に「間無堅間」へマ
シカタマ」と載せてあるのは、
塩土公羽の神徳のことである。
そして「カタマ」は球を意味
する。

伊勢大神宮をはじめとして
日本の神社に水精球を神
宝とするのは、「マナシカタマ
の「カミカカリ」を表現してい
る。これは仏教で表現すること
の「不空羅索觀世音菩薩
の金剛繩」の勵きと同じ
ことを意味している。
である。

五 三つの小分け(薄片)に折って、
六 剣とは無関係な「瓊の音も玲瓏と」という
形容があるのは、後の文
に引かれた不用意の挿入
であろう。

2 天の安の河の
誓約

七 書紀には「天浮名
(アマノナヅナ)」別名「去来之真名(イザナノナヅナ)」とある。
名義未詳。井は用水を汲む所の意で、この井は
安の河の中の井と見るのが穏やかであろう。

八 振りは接頭語、滌ぐは洗い清める意。
九 書紀には「豁然咀嚼」とある。「さ」は接頭
語、噛みに噛んでと語を重ねて動作を強めた表
現。

一〇 吐き出す息吹の霧の意。雄略紀には「呼吸
氣息(イサツ)、似於朝霧。」とある。

一一 書紀には「田霧姫命」とある。霧のキは乙
類の仮名であり、紀も乙類であるから、霧に因
んだ神名であろう。多(田)は接頭語か。

一二 沖の島に坐す女神の意。

一三 書紀には「市杵(イサノ)島姫」とある。イチキ
はイツキ(斎)の転音ではあるまいか。

一四 船の寄る所に坐す女神の意。

一五 書紀には「湍津姫」とある。早瀬の女神。
一六 正勝は正しく勝った、吾勝は私は勝った、
勝速は素早く勝ったの意。日は太陽に因んだ名、
忍穂は多し穂で豊かに稔った稲穂、耳は尊称で
あろう。

一七 書紀には「天穗日命」とある。これも稲穂
と太陽に因んだ神名であろう。

一八 天つ日、即ち太陽の子の意。根は親愛の意
をあらわす接尾語。

一九 生き生きとした日の子の意。

二〇 熊野は地名。久須毘はクシビ(奇霊)と同義。

答へ白ししく、「各字氣比て子生まむ。」とまをしき。
宇より以下の三字は音を以て、下は此れに效へ。

故爾に各天安河を中に置きて宇氣布時に、天照大御神、先づ速須佐之男命

の佩ける十拳劍を乞ひ度して、三段に打ち折りて、奴那登母母由良爾、
此の八字は音を以て、下は此れに效へ。

此れに效へ。天の眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、
宇より下の大字は音を以て、下は此れに效へ。吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、多紀理毘賣命。
此の神の名は音を以て、下は此れに效へ。亦の御名は奥津

島比賣命と謂ふ。次に市寸島上比賣命。亦の御名は狹依毘賣命と謂ふ。次に多

岐都比賣命。
三柱。此の神の名は音を以て、下は此れに效へ。速須佐之男命、天照大御神の左の御美豆良に纏かせ

る八尺の勾璫の五百津の美須麻流の珠を乞ひ度して、奴那登母母由良爾、天の

眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御

名は、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命。亦右の御美豆良に纏かせる珠を乞ひ度し

て、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、
天の菩卑能命。菩より下の三字は音を以て、下は此れに效へ。

命。亦御纏に纏かせる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つ

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏かせる珠を

乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、活

津日子根命。亦右の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。
久より下の三字は音を以て、下は此れに效へ。并せて五柱な

日本民族が日本語としての神言靈を忘れ佛教が傳ふるところの阿彌陀佛音を唱ふるもののみ多きが如く基督教徒が正しき神言靈^{カミノコトタマ}を傳へながら之れを奉唱することを知らずして反って禍津毘の禍言を唱へつつあるが如く各國各民族は相率ゐて分裂分散に走り下向轉落しつつあるは悲しむべく憂ふべきの甚しきものである。

たまたま言靈^{カミノコトタマ}を云ふ者はあつても全音義の何たるかを忘れて居ること柿本人麿をはじめとして近時の言靈學者と称するものの皆然るところで為に却つて甚しき謬見邪説を出して世を毒し人を苦しめて居る。

ふるべ^{カミツヒ}ゆらと古典に載せたのは斯のような禍津毘^{マガゴト}の禍言を指したので之れは五音二言の禍言靈である。これに由^ユ良止袁布留^{ラフ}邊^ヘの七音を加へて布留^{フル}邊^ヘ由良^{ユラ}

由良止袁布留邊の十二音三言と成す時は禍津毘調伏濟度救出の神音^{カミノコトバ}と化るので阿三忙銀^{アサマギ}儼^ニ吽^{ウン}吽^{ウン}尾^ビ觀^キ南^{ナム}の音は禍言であつて阿三忙銀^{アサマギ}儼^ニ吽^{ウン}吽^{ウン}尾^ビ觀^キ南^{ナム}吽^{ウン}但羅^{タラ}吽^{ウン}吒^タ悍^{カン}漫^{マアナム}の音は佛言で禍津毘たる六種外道を調伏し濟度し救出するの祕言密語であるとの祕言靈^{ヒメコトタマ}で神直靈^{カムナホビ}の神言である。

ふるべ^{カミツヒ}ゆらゆらとをふるべ。ぬなとももゆら。

浅間山人こそ仰げ眞賢木の綠色濃く照りにぞ照りたる。

資財を用ゐず材料無しに事業の成立つと云ふことはない。不正不美不善なるが如きも一切は命^{イノチ}である天命である。之れを使用するは直日^{ヒト}であり神直日^{カミノヒト}であり直^{カミノカムワザ}靈^{カミノカムツナ}であり神直靈^{カミノヒト}であり神日本^{カムヤマト}磐余比古^{イヘヒコ}である。之れを阿知米阿知米^{アチメアチメ}於於^{オオオ}と教へられてある。

「^{エト}直日」も「^{カミナリ}神直日」も（中略）

「アタメ アタメ オオオ」も 無宇宙の側の実在を指して
言う名称である。

そして、無宇宙の側の実在は、常に

宇宙の側にある存在を「資財」として使用する立場
にある。

人間においては、^{ナホ}直日が使用する側であり、

^{ミタマ}身魂は使用される側の存在である。

故に「^{ナホ}エト」としての主体は「^{ナホ}直日」であり、

そのため、ここでは「直日」と書いて「エト」と読ませている。

直霊と空零

根本資料

組み合わせる

構造体

無
宇
宙



ヒノカミ

日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

根本魂
(筒体の中心)

ナホヒ
直日

タマノラヲ

①

統率

トリエ

③

又ナトモモウ

ラカシテ

マガツビ

②

フルベ

ユラト

ラフル

ユラ

フルベ

②

スサノヲ

調伏

マガツビムシ

妖魔群

(肉体身など)

②

流出 (イザナミ)

ミヅガキ
瑞垣

統率

(相違)
状況・状態を表現
する言葉

国生み

(イザナギ)

十四島・三十五神

①
カミ
神に帰順したる妖魔

(上位の身魂・外部)

死後、解体される
(ツキヨミ)

クシニタマ
サキニタマ

空零
(零)

神話では
ニルコ

宇

宙

カタタス

素材領域

スリ

筒体領域

宇宙では、ヨモツクニ

(イザナミ)

宇宙では、ナカツクニ

(イザナギ)

ナホビの妙用

(4/10)

主体	別天神、神ならざるの神、神魔同凡のカミ (別名、大禍津日) オホマガツヒ
↓	
その作用	(実際には、多数ある作用力のうちの一つ) 直霊の妙用、マガツヒ (神に帰順した禍津毘) の活用。 ナホビ マガツヒ
	ヒ 「零」なる霊
	ニギミタマ
第一段階	1. これが、直日(中心)の統率のままに〜と成る。 ↓ 妖魔群団身 (中心の統率に従っているのだから、 クシミタマ サキミタマ これは「神に帰順したマガツビ」である。
第二段階	2. これが、妖魔軍として (妖魔のままに) 〜を調伏済度救出する。 ↓ 他の妖魔 (まだ神に帰順していないマガツビ) マミタマ アラミタマ
└→	こうした二段階の妙用によって、 太平嘉悦の樂土(神国)が築成される。

- 4- 故に、「ふるべゆら、ゆらととふるべ、ぬなとももゆら」は、
 全体として「マガツビを救出し、これを無宇宙の零^ヒにまで」
 分解して、次の何らかの資材とする」ためのコトワとなる。

- 3- ^{ヒメカミツガ}
 「宇宙化育の秘神業」を表現したコトワが
 (スリとカタメナス) 「ぬなとももゆら」

- 2- このマガツビを、
 調伏済度救ます
 神言カミノコトバ

「ふるべゆら
 ゆらととふるべ」

- 1- マガツビ マガト
 禍津毘の禍言 — 「ふるべゆら」 — マガツビそれ自体と
 指す用語か？

2020.2.18.(火)

NO.

DATE

ヨモツウニ
素材領域

ナカツウニ
箇体領域

ヨモツウニ
素材領域

無^ヒ宇宙
(極大極小のため)

宇宙

大被

より粗雑な部分は
そのまま火に焼かれ
ハウへの対象となる。

(尽天尽地の火)

直日

1
奇

2
幸

3
真

4
荒

同下

普通は省略してこう
表記するが、実際には、
A→Bの2段階

①

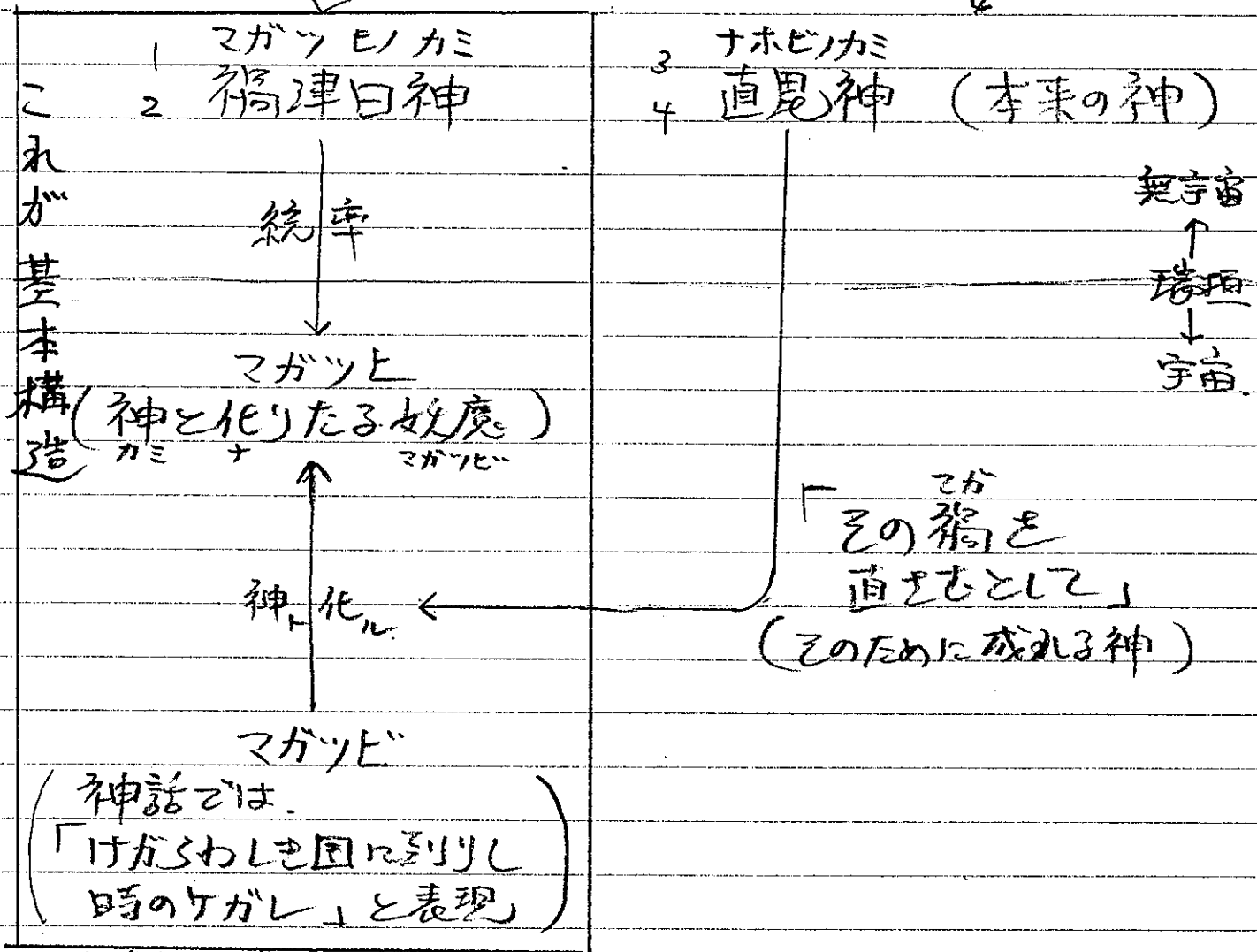
より精妙な部分は
鉤ひ直されて、
上のミタマへ。

瑞垣

(幸83では、イザナギのたに化神(化身))

付表No.

(分掌神 2/9)



「けがれ」よ
「汚垢に因りて」は、「ケガレをマガツヒに変えて
統率せんがために」くさへの意味

付表 オホミマノハラヘ

御身之禊

によりて成りませる 十四神 一覽

言霊の幸
66頁より

番号	神名	集合名	その内容
1	ヤソマガツヒノカミ 八十禍津日神	ワガレ 黄泉国の穢に因りて	カミ ナ マガツヒ
2	オホマガツヒノカミ 大禍津日神	成りませる二柱	神と化りたる妖魔
3	カムナホビノカミ 神直毘神	マガ 其の禍を直さんとして	
4	オホナホビノカミ 大直毘神	成りませる三柱	//
5	イヅノメノカミ 伊豆能売神		
6	ソコツワツミノカミ 底津綿津見神		イザナギノオホミカミ
8	ナカツ 中津 //	三柱の綿津見神	伊邪那岐大神の
10	ウハツ 上津 //		気吹の狭霧 イブチ サギリ
7	ソコツツノヲノミコト 底筒之男命	スミノエ オホカミ	
9	ナカツ 中 //	墨江の三前の大神	//
11	ウハツ 上 //		
12	アマテラスオホミカミ 天照大神	ミハシラノウヅノミコ	上
13	ツキヨミノミコト 月読命	三貴子	尽天尽地の丈としての 伊邪那岐命
14	タケハヤスサノヲノミコト 建速須佐之男命		イザナギノミコト

2020.9.1.

ナホヒ

直霊

無宇宙にある素材としての零

(ヒ)の段階にあるものまで含めて言う。

ナホヒ

直霊

ナホヒ

直霊

直霊の神 本来の神

「素材としての直霊」とは、区別される。

普通は (7)の段階にあるアマツカミである。

高津日神

「それ自身がマガツヒである神」ではなく、

「マガツヒを統率するところのヒノカミ」のこと。

はるひひめ

多田山公秘稿

行く歳の空打ちまもり我立て
は雁の一連西に行く見ゆ。

ゆく人の皆清かれと知るかぎ
り皆明かれと神ながら神のうけ
ひて神がかかります。

他を教化するの難事なるは、
目他を了得したる上にて、他の
醜惡邪曲なると同一歩調を持し
つつ誘導せざるべからざるが爲
なり。

於此か禍津毘の行を要す。

禍津毘と共に遊行しつつ禍津
日の神業を行ぜざるべからざる
ものなれば之れを火人と呼ぶ。
妖魔を調伏濟度するは火徳に
依らざるべからざるを以つてな
り。

之れを祓と称して伊邪那美神
の主りたまふところなり。

八種雷にして黄泉醜女にして

坐坐黄泉戸神にして、道反神に
して道敷神にして、非にして否
にして緋にはあらざるなり。

黒色黒光にして陰極にして陽
極にして零なる靈にして、○に
して□にして、◇にあらざる田に
あらず罫にあらざる、固より◎に
ても回にてもあらざるなり。

之れを毘古と呼びて破壊し了
りたる毀なり破壊の極なり。

スリにして修理にして、固成
にあらざるの固成なるなり。

女の極にして、女罔きの女な
れば罔象女と称するなり。

他を教へんとすれば禍津毘と
ならざるべからざる。

之れを三十五となしハルヒヒ
メと呼ぶ。

ハルヒヒメはその面貌醜惡に
して鬼畜の如くなれば、之れを
醜女と呼ぶ。

醜女は伊邪那美神の主るとこ
ろにして伊邪那岐神の投げ棄つ
るところなれば、伊邪那岐命伊
邪那美命二柱神の産出したる天
照坐皇大御神天照皇大御神天照
大御神にてましますなる天照大
御神建速須佐男月讀命にして、
月夜見月弓月讀命にして、建速
須佐男尊にして、三貴子なり、
三重子なり、三種神器なり、八
種雷神なり、十種神寶なり。
大禍津毘にして八十禍津毘に
して禍津毘にして大直日神には
あらざるなり。

大直靈にして八神にして十神
にして大食津比賣にして櫛稲毘
賣にして少名毘古にして薬師神
にして奇靈怪異なる稻倉玉尊な
り。

以上

「ハルヒヒメ」と「ハルヒヒメノカミ」

前にも、『マガツヒノカミ 禍津日神』というのは、「マガツヒを統率しているところのヒノカミ」のことであって、それ自体は「マガツヒ」

ではない』という主旨の文章を書いたことがあるが、

それと同様に、「ハルヒヒメノカミ」もまた「ハルヒヒメ」のことではない。

秘稿『はるひひめ』によれば、ハルヒヒメとは ^{シコメ} 醜女の別名であり、明らかにマガツビの一種である。

一方、未来336頁によれば、ハルヒヒメノカミとは、

ミハシラウヅノミコ
三貴子の別名である。

従って、当然に、ハルヒヒメノカミとは、ハルヒヒメのことではなく、「ハルヒヒメを統率する神」のことである。

秘稿では、主語が省略され、文意が読み取りづらくなっているが、下段の文章は、赤丸をつけた文の主語がハルヒヒメ、
(。)

カギ印以降の文の主語がハルヒヒメノカミ、と解釈すべきである。
(。)

また、三貴子の作用は、^{はたらく}ひとつには、「マガツビを調伏し、
統率し、それをマガツヒとして、神国を築成させる」ことだが、^{なの}
そのためには、しばしば、「日隅宮」を經由して「より下の階層に
在るモノを、より上の階層へと引き上げる」という作業が
必要になる。言わば、未来326-327頁に書かれた順を
前に送り、より繁多で複雑なモノを、より簡素で単純なモノ
へと「組み直す」のである。

神国築成の過程において、決定的に重要な役割を果たす
が故に、「日隅宮」はそれ自体が一個の神界であるものと
見做され、教理の上では「三十五神界」と呼ばれる。

(^(ハルヒヒメ)その宮で組み直されるマガツビもまた、教理の上では三十五
とされる。)

そして、神国築成が完成した状況を「三十六神界」と
称す。(秘稿『地蔵八景』より)

これらの数理は、「^{イツヨ ナナヨ}五代で七代だから、 5×7 で35だ」とか
 「三の十倍は六を足して三十五だ」などと説明されることも
 あるが、より本質的には、35は $3+5$ で8の数理と、
 36は $3+6$ で9の数理と同様の意味なのである。
 「8」とは外郭であり、そこに中心の「1」を加えて、統一体
 としての「9」になる。

即ち、^{まう}ハルヒヒメ₍₃₅₎は、三貴子という「中心」に服ふ、「外郭」
 であり、これが完全に神化した暁には、そこは
 『天照皇大御神の榮きたまひて、天照大御神の知しめし
 ます、天照皇大御神の神界』としての「高天原」
₍₃₆₎
 となるのである。

(コトワマとしての「ハルヒヒメ」に関しては、また別稿をもうける。)

であらう。

此の種子を「日隅宮」に播いて、発芽生育するのを眺め楽しむのは、大国魂の秘神挂りである。

這が秘である理由は、上来略、説き得たと思ふ。若しまた会せざる者も、そのまま、次ぎに進まねばならぬ。言論文章の捕虜と成つてはならぬ。言語文字は、月を指すの指にほかならぬ。指にこだはり、指に囚はれ、指に迷つてはならぬ。筆者もまた、他の謗りを誉とする理由は無い。

第五節 完

第六節

曉を告ぐる太鼓の音は、國の内外に響き、曙の光は、天地を裹む。

大宇宙は一つである。その一つである日隅宮の比売神の大稜威は、世を照し人を導きて、神国淨地を築かせ給ふ。

此の宮を、数理観では、第三十五神界と称へ、三十五の零と教へて、春日比咩の神の知ろしめします「火海」である。

春日比咩の神と称へまつるは、燃ゆる火を取り、光る日の神代を築かせ給ふ三柱の貴子にてまします。

あなかしこ。

神の代の栄光は涯ても無し。

その慈光限り無し。

烈烈たり。

赫赫たり。

而してまた、

穆穆たり。

ああ。されど、

人の世界は、鬼畜妖魔と離るることを能はず。否、人間以外の六道十界とては在らざるなり。然り。而して、神、之を

「よし」と宣ふ。

美しさを求め、正しきを願ひ、善きを行はんと思ひ煩ふ人の子を、神また、

「よし」と宣ふ。

善か悪か、美か醜か、正か邪か。唯是、這の存続を願悩希求して燃えに燃ゆるなることをも。神また、

「よし」と宣ふ。

まことに、

這は教にあらず。

釈尊拈華。復、言説せず。

日本神道言挙げずして、神国築成せらる。

之を、第三十六神界主神の秘と称へて、宇宙完成の妙徳なり。大日本天皇国完成の秘儀また這の裡に備はる。

日本古典は、之を伝へて、「天沼矛」と称へまつる。その亦名^{マダノミナ}また幾十百千。而して、之また、上來縷述せると

ナホヒ^{くうれい}
直霊と空零

① 根本資料 → 組み合わせる → 構造体 ②

無
宇
宙

ナホヒ^{ムスビムスビ}
直霊
ヒ
(零)

ムスビムスビ
産霊産魂

ヒノカミ

日神 (アマテラス)
(宇宙の中心)

ナホヒ

根本魂・直日
(箇体の中心)

ミヅガキ
瑞垣

流出 (イザナミ)

統
率

(アマテラス) ----- (左に 統率 神習って)

宇

空零
ヒ
(零)

神話では
ヒルコ

国生み

(イザナギ)

十四島・三十五神

ハルヒ

マカツビ②

神に帰順したる妖魔
(上位の身魂・外郭)

死後、解体される。
(ツキヨミ)

調伏 (スサノヲ)

マカツビノムシ
妖魔群

生前、罪や穢れを赦われる。(肉体身、など)
(スサノヲ)

マカツビ①

(ヨモツ
ヒラサカ)

素材領域

宇宙では、ヨモツクニ
(イザナミ)

箇体領域

宇宙では、ナカツクニ
(イザナギ)

「敬神」であることは、次ぎの「祓言」に依つて知ることが出来る。

「祓言」
ハラヘコトバ

マキリツドヘル ヒトビト クニツチャマカハ クサモキモ ソラユククモモ ツチクグルムシモ アメツチノアリノコトゴト ケフノハラヘノミマツリニ オノモオノモガ
参集閑留人。国土山河。草木。空行雲毛。地潜虫毛。天地乃在乃尽。今日乃祓乃御祭爾。各自各自我。
アヤマテオカシケム クサグサノトガトイフトガ ツミトイフツミノ アカトケガレトヨ ハラヘヤラヘキヨメタマフ カミノカミワザ カミコトタマヲ ツツシミカシコミヲロガミマセ
過犯計牟。雑雑乃尤云尤。罪云罪乃。垢斗穢斗乎。祓却閑清給布。神乃御惠。神言靈乎。敬美畏美拜美坐勢
トマラス 斗白須。 自らの意識が宇宙の側にある状態から始まる。

伊宇袁衣耶。

宇斗乃宮。宮斯呂築成住我乎。神乃我叙斗。神知須邇邇。神乃神輪叙 晃耀赫灼矣。

阿知米。

阿知米。 自らの意識が無宇宙の側にあるものとして始まる。

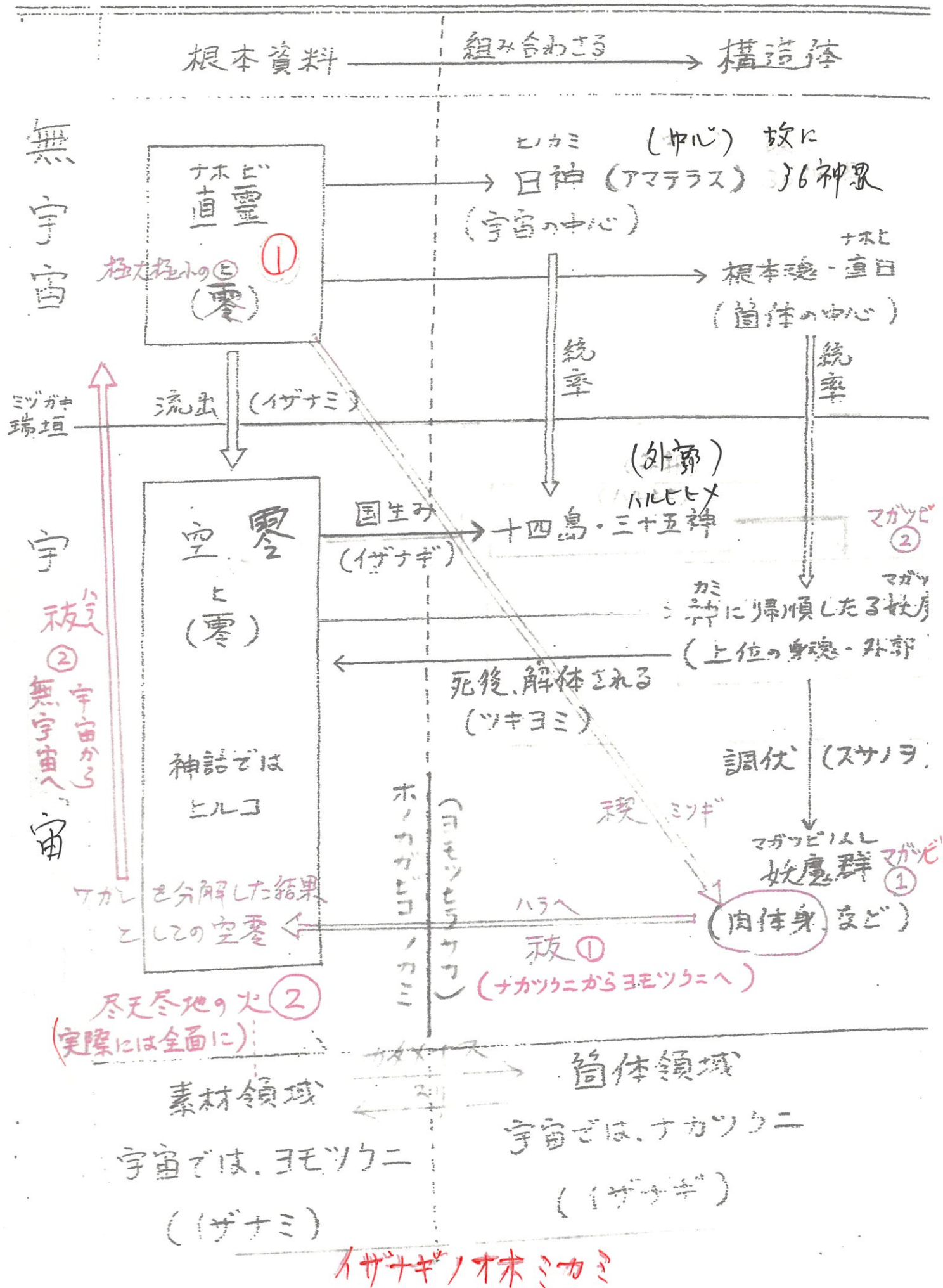
阿宇袁衣耶。宇。宇。宇。宇。斗。宇斗。宇。

カク ウシナヒテバ アメツチノアリノコトゴト ケフヨリハジメテ ツミトイフツミハアラジト ハラヘヤラヘタマフコトノタフトサヲ カシコミカシコミテ ヲロガ
如此久失氏婆。人天万類尽天尽地。今日以降。罪止云布罪波不在止。祓却給事乃尊乎。恐美惶美且。奉

ミマツリ キヤマヒマツリ マツリマツルトマヲシマツル アマテラスオホミカミ カムロギノミコト カムロミノミコト タケハヤスサノヲノミコトト オホミナハタタヘマツリテ アメノ
拜。奉感謝。奉 祭止奉白留。天照大御神・神漏岐命・神漏美命・建速須佐之男命止。大御名波奉称且。天

ミオヤアメニツルヒノアサノサギリクニツルヒノクニノサギリノミコト カシコシ
祖天 讓日天狭霧国禪日国狭霧尊。畏。」

直靈と空零



人間身においては、

直日 (事業の神)

サキミタマ・タシミタマ (神に帰順した子マカツビ) → マカツビ

マカツビ②

アラミタマ・マミタマ (まだ充分には神に帰順
していませんマカツビ) マカツビ①

神

カミ (人間身では、通目)

統率

神と化りたる
マガツヒ

ハルヒヒメ (シコメ) の子

(マガツヒを調伏するためには、自分もまた
マガツヒの様相を呈せざるを得ない
(幸身魂・奇身魂))

魂度救出

(カミと化っていない)
マガツヒ

ヨモツシコメ (妖魔群)

人間身で言えは、肉体身と夏身魂

付表 オホミマノハラハ

御身之禊によりて成りませる 十四神 一覽

言霊の幸
66頁より

番号	神名	集合名	その内容
1	ヤリマガツヒノカミ 八十禍津日神	ワガレ 黄泉国の穢に因りて	カミ ナ マガツヒ 神と化りたる妖魔
2	オホマガツヒノカミ 大禍津日神	成りませる二柱	
3	カムナホビノカミ 神直毘神	マガ 其の禍を直さんとして	
4	オホナホビノカミ 大直毘神	成りませる三柱	//
5	イズノメノカミ 伊豆能売神		
6	ソコツ ワタツミノカミ 底津綿津見神		イザナギノオホミカミ
8	ナカツ 中津 //	三柱の綿津見神	伊邪那岐大御神の
10	ウハツ 上津 //		気吹の狭霧 イブキ ケガリ
7	ソコツ ツノラノミコト 底筒之男命		
9	ナカツ 中 //	スミノエ オホカミ 墨江の三前の大神	//
11	ウハツ 上 //		
12	アマテラスオホミカミ 天照大御神		
13	ツキヨミノミコト 月読命	ミハシラノウヅノミコ 三貴子	ヒ 尽天尽地の史としての 伊邪那岐命
14	タケハヤ スサノヲノミコト 建速須佐之男命		イザナギノミコト

六道輪廻(二)

多田山公秘稿

コトタマ

六とは数下はない。

ムと發する音義(ひびき)の示すところである。

〔其の音義(ひびき)をコトタマと日本民族は傳承へて居る。〕

ムとは空零で、正邪の外に存るの義で、正邪を築くの點である。

故に六道と呼ぶので、六道各界なので、各世界が六に歸結して大死を得るので、六とは大悟徹底すべき方途(みち)である。

發(ひら)いて闔(と)じて窮盡(つきとうす)ので、極小の火に徹するのである。

地獄の釜の底を打ち抜くので其処は光明赫灼一圓昭昭一音琅琅たる大宇大宙(ただひかりのみ)である。

初に光存り、徹底即達頂、極大

即極小(ひかりはかみなりき)、

であるから、六とは極(はて)

が無いので、箇體たる小宇宙が

其の源泉である大宇宙に到達す

る道なのである。

無(む)なので空零である。

無中心であるから一點(ひ)である。

けれども、唯に無いのではない。

唯に無いと思はば、六道輪廻で地界魔境に縛められたのである。

六は成数の外に脱出したのであるから、之れをココロと呼びて靈念思考と千變萬化するとなのである。

此のヒを六道と呼ぶので、結ばば直靈で、脱出すれば禍津毘で、共に宇宙を築きながら宇宙を破壊する神魔なるイノチなのである。

で、人の心は平常肉體外に脱出しつつ魔想魔心と化(なり)ながら又、内に歸りて魂となり直日となり又復、脱出を企てて禍津毘となりつつ往還流行寸時も止むことは無いので、結ばば神解くれば日、逃ぐれば魔なのである。

小宇宙としての箇體は無間斷に其の箇體自身の外に脱出そうとする心を有つて居るので、其の脱出した心が其のまま自分自身を離れて別な箇體を築いて獨立生活を營むことがある。

此の離れた心を日本では遊離諸魂(ばけみたま)と教へて居る。

術魂(ばけだま)とも云ふので、幽靈とか亡魂とか云ふのと同じで、魔境魔界の主である。

此の魔境魔界を調伏し濟度し救出するは神徳で、其の色相は綠色である。

綠色は張落榮枯を教へた色で教へたと共に事實であるので、スリカタメナスナルアマノヌホコの示言靈を指すので其の色で

地蔵佛界(四)

多田雄二

印度では佛陀と伝へたので、別の言で云へば一圓相で一音響である。ですから基督教の誓約に言(ことば)は神なりき、光は神なりきと伝へたところと同義である。

人間身にして此の一圓相と成り、一音響となる方図を日神事と称へまつりて天津神の教へたまふところであります。

印度の佛伝では不幸にして今は伝へ得て居らぬし、基督教の伝へも亦今は断絶してしまつたのである。

劫火と云ふ、劫は時間であるから、劫火とは時到期りて一切罪業は消除せねばならぬ、必、消除すべく償還を命ぜられるのであるとの義で無間地獄の火である。

之れを日本語ではスリと伝承へて来たのを古事記編集の際、太安萬侶が修理の支那文字を充当てた為、後人が読み誤ると共に、原語の意義を忘れたのである。

それでスリとは禍津日。

禍津日とは悪魔を調伏済し救出して善美正直ならしむる加美(かみ)である。之れを日とも日神とも称へまつるのであります。

日神事と称へまつるは之の神事であるから、世人の云ふやうな仇敵と名づくべきものは無いのである。一切は日光であり加